

第197回 令和8年3月18日(水)

「コンコルド問題について」

「失敗の本質」を読んだことがあるでしょうか。先の大戦で日本のどこが失敗だったのかを分析したベストセラーです。補給線の軽視や精神論に偏りすぎたことなどもありますが、日本人特有の真面目さが抱えるリスクがあります。

コンコルド問題とは大量の資金をつぎ込んで開発に取り組んだ超音速旅客機のコンコルドが採算に合わないことに多くの技術者が気づいていたのですが、ここで止めてしまうと今までの苦労が水泡に帰すという考え方で継続され、多額の損害が生じたという教訓です。

旧日本軍も「大東亜共栄圏構想」など戦線を拡大してしまっただけゆえに戦いが厳しくなりましたが、計画を遂行した大本営はそれを止めることができなくなっていました。その結果対応が後手に回り最終的には原子爆弾の投下まで戦争を止められませんでした。

現在もあらゆる組織でスタート時に「目標」を掲げます。途中で修正することも可能なのですが初志貫徹しないと計画倒れのように感じ、やり切ろうとすることが多いように思います。

世界は偶然の積み重ねでできていますし、相手がある事ならなおさら自分の思い通りにはなりません。自然災害も含めコントロールできるものではありません。自分自身でさえ、いつ病気になったりケガをしたりするかわからないのですから。

目標とは遠くで輝く北極星のように、「いつでもだれでも見ることができて」「記憶からなくなることがなくて」「自分の進む方向を指し示す」ものであれば十分だと思います。具体的なプランや詳細は「自走しながら最適化していく」ことが良いのではないのでしょうか。

自分の行動が正しい方向に向かっているのかを確認できればその道のりは近道でも遠回りでも良いと思います。遠回りしたほうが、喜びが大きかったり、多くの縁に恵まれたり、自分の力がついたりすることもあります。

ある有名なマラソンランナーは42.195キロ先のゴールをイメージせず、競技中は目先の計画を必死に考えていたそうです。給水所までがんばろう、次は折り返し地点まで頑張ろうと。トータルのタイムはその積み重ねで結果が出るものです。

達成したら終わってしまい、その後の行き先がわからなくなってしまうようなことではなく、将来自分はどこに行きたいのか、どのように生きていきたいのか、方向を示す北極星のような目標の立て方がベストなのではないかと考えています。